

北三沢地区のほ場整備を契機とした農地の集積・集約化について
 About accumulation and consolidation in the farmland where the farm land
 consolidation in the Kitamisawa area was made opportunity

八重樫 俊治 ○澤井 豊 佐藤 飛雄馬
 (YAEGASHI Shunji) (SAWAI Yutaka) (SATO Hyuma)

1 はじめに

経営体育成基盤整備事業北三沢地区は、青森県東部の小川原湖と太平洋との間に位置し（図1）、国営事業により昭和初期から昭和40年代にかけて基盤整備事業を実施しているが、低平な湿地地帯で転作が困難なことに加え、夏季の冷涼な北東風“やませ”の影響により、米の生産調整が始まった昭和45年以降、離農者が相次ぎ耕作水田が散在し、水田の集約が急がれたところである。

一方、地域の中心部にはラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に登録された仏沼（写真1）があり、現在はヨシが生い茂る湿地となっており、オオセッカやコジュリンなどの希少種の繁殖地となっている。

本地区の99.6haを管理する北三沢土地改良区では、担い手不足などから、年々増加する耕作放棄地に危機感を抱き、ほ場の大区画化や汎用化により生産力と生産性の向上を目的に平成22年度からほ場整備事業を行ったものである。

2 事業の取組内容

事業の実施にあたり、農林漁業者、地域住民、土地改良区、自然保護団体、有識者、行政機関を構成員とする北三沢地区環境公共推進協議会を設立し、オオセッカ等の生息環境の保全や工事施工に伴う影響の検討を行い、ほ場整備工事をオオセッカの繁殖時期の5月～9月を避け、10月から3月とし、環境への影響を緩和するため2ヶ年で区画整理を行うなどの配慮を行った。

また、平成23年4月、地元農家14人が“農事組合法人フラップめぐり北三沢”を設立し、

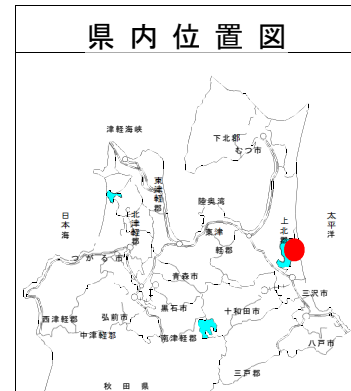


図1 位置図

Fig.1 Location map



写真1 地域状況

Photo 1 Area situation

整備された地区水田 99.6ha のうち 98.7ha の農地集積・集約を図り (図 2)、土地改良区へ支払う水利費やほ場整備の工事償還金の負担を担っている。

フラップあぐり北三沢では、ほ場整備による大区画化及び地下かんがいシステム「フォアス」による排水性の改善が図られたことにより、飼料用米の乾田直播栽培 (写真 2) を導入し、イネ・ホールクroppサイレージ (WCS)、イネ・ソフトグレインサイレージ (SGS) の作付けを行っている。これにより、営農の省力化、低コスト化による新たな営農体系の確立を目指すとともに、地域の基幹産業である畜産業との連携強化が図られている。

イネ・ホールクroppサイレージ (WCS) は 9 月に収穫 (写真 3)、イネ・ソフトグレインサイレージ (SGS) は 10 月に収穫することで、作業の分散化、労働時間の短縮が図られている。

工事完了後も動植物のモニタリング調査を継続し、動植物の良好な生育環境の保全に向けて、地域全体で協力していくこととしている。

3 今後の取り組み

今後は、ラムサール条約湿地の知名度を活かした①「オオセッカ」ブランドの育成②高付加価値作物の作付けを検討している。

また、北三沢地区の整備水田での営農を契機として、隣接する八幡地区 23.7ha (写真 1) のほ場整備事業が平成 27 年度から始まり、すでにフラップあぐり北三沢が農地中間管理事業を活用し、21.5ha の農地集積・集約を行っており、工事の完成が待たれている。



写真 4 オオセッカ
Photp 4 Oosekka



写真 5 コジュリン
Phot5 Kojurin

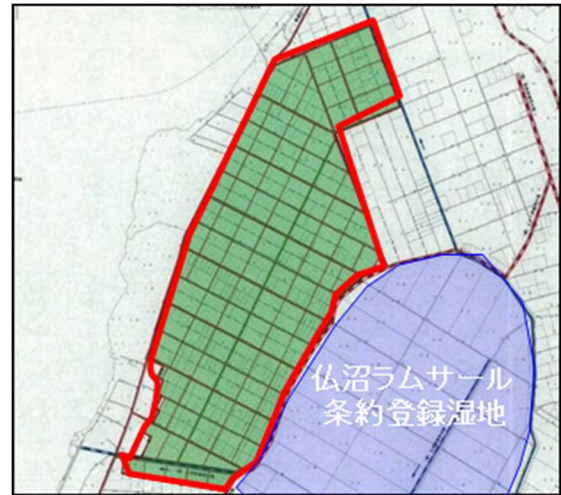


図 2 農地集積

Fig 2 Farmland accumulation



写真 2 乾田直播

Photo 2 Dry rice field direct planting



写真 3 WCSラッピング

Photo 3 WCS Lapping